

鉄道員の独り言

庄内銀行 頭取 町田 睿

妻が浅田次郎の直木賞作品「鉄道員」を買ってきた。

映画も見に行こうという。高倉健が主演だ。

高倉健の実像と、無口で愚直、不器用な男の役柄がダブリ、涙腺が刺激されっ放しになった。

監督の降旗康男が母校松本深志高校を訪れ

後輩の高校生に感想を聞きに行った。

途中で高倉健が応援に駆けつけて懇談に加わった。

その模様がNHKの朝のテレビで放映された。

仕事一途の男の生き方に、高倉健がとつとつと語る。

「そんなに仕事って、いつも楽しいことなんてありやあしないよオ。

志高くやってて、みんなうまくいくなんでそれもないと思う、僕は。

絶対ないな。ホンノたまに、ちょっとあるだけですよ。

ああ生きてるの悪くねえナってのがね。

それも一生懸命やってないと、きつくないと思いますよ」

「うーん、このごろとつても気になるのは、えー、人が何をしたか

ということじゃなくて、何のためにそれをしたのか。ということが

とつても大事な時が来ているんじゃないかな、という気がしますねえ」

「平成11・5・29（土）付朝日新聞、天声人語より抜粋」

今の日本に最も欠けているものは、志の高さではないだろうか。

泣けて泣けて涙が止まらなかった感動を増幅したのは、

鉄道に一生を懸けた男のロマンがあったからではないだろうか。

僕の好きな言葉「一隅を照らす」にぼっぼやが厚味を加えてくれた。

スコープ

ふるさと訛り

鶴岡ウィメンズフォーラム代表 東山 昭子

ふるさと訛りには、どこか懐かしさが伴う。

特に或る年代以上の方々には、訛りにつながる山河や人々、

経てきた自分の歩みさえ、瞬時に思い起こさせる響きとなるらしい。

すぐれた観光地では、地元の方も、路線バスの運転手や売店の方も、

それぞれの笑顔で語りかけてくれるが、

私の訛りの強さは、殊更に山形を感じさせるらしい。

北でも南でも、女房が温海町から来ているとか、母の実家が上市市だとか

話はずみ、果ては思いがけない観光アドバイスまで、受けてしまう。

国語教師であった頃、鷗外の舞姫を読み聞かせて、

豊太郎がエリスの教育に心をくだき、

漸くに「趣味をも知り、言葉の訛りも正し、

いくばくもなく余に寄する文にも誤字少なくなりぬ」のくだりで、

必ず教室に明るい笑いが起こった。

一度でいいから訛らない授業をと望んだ生徒たちの共感の笑いである。

国分一太郎の書く内陸弁を読んでもやると、驚嘆する。

消えつつある方言に、彼らは無邪気だ。

一昨年九十六歳で亡くなった母は、最後までボケもせず病むもしなかった。

ただ言葉だけは急速に生まれ在所のものになった。

「オショーシナツ」は「有り難うございます」より、心に徹る言葉だった。

土着だからである。

誇るに足る故郷をもつことは、幸せである。

居直るわけではないが、高齢社会に心をつなぐには、

ふるさと訛りもそよ吹く風のごとくに大切にしたいものと思う。